

# 創価教育と通信教育の歴史

岩 木 勇 作

## はじめに

創価大学は2021年に開学50周年を迎えました。開学後に設置された通信教育部も2026年に50周年を迎えます。本寄稿は、創価大学通信教育部50周年に向けた企画として、通信教育部の機関誌『学光』の2024年春夏号No.7～2025年冬号No.12に全6回掲載した「創価教育と通信教育の歴史」を編集したものです。必要な修正は加えましたが、内容は掲載時と変わりません。連載の目的は、通信教育部50周年に先立って、改めて、創価教育と通信教育の結節点である牧口常三郎（1871-1944）、戸田城聖（1900-1958）、池田大作（1928-2023）を歴史的な視点から掘下げ、創価教育における通信教育の意義を明らかにするところにあります。学内・学外問わず沢山の方に御味読いただければ幸いです。

## 1. 若き牧口常三郎とその時代

### 若き牧口常三郎

渡辺長七（後の牧口常三郎）は、1871年（旧暦）6月6日に柏崎県刈羽郡荒浜村（現在の新潟県柏崎市荒浜）で生まれました。1873年からは、日本でも太陽暦が採用されるため、旧暦の6月6日は、新暦で換算すると7月23日になります。ただし、牧口自筆の履歴書を確認すると、生年月日欄には「6月6日」と記載されているため、改暦後であっても6月生まれという意識があったようです。改暦を一つの例として取り上げましたが、牧口が生まれ育ったのは、このように日本の近代化により様々な制度・文化・習慣が目まぐるしく変わっていくような時代でありました。教育の分野においても、1872年8月に学制が公布され、日本で初めて近代学校制度が法令として定められました。学制という青写真をもってスタートしますが、教育の現状に鑑みて修正、近代化への反動から改められるなど、近代学校制度は、紆余曲折を経ながら普及していきます。

長七は、1877年に牧口善太夫の養嗣子となり、その後、第六大学区第四中学区私立第四番小学第一分校（後の荒浜小学校）で学んでいます。当時は不就学者の割合が高く、荒浜村では

1874年時点で学齢児童のうち就学者の数が17%程度でした。家業の手伝いなどで、行きたくても行けないような状況があったのだらうと思います。1884年頃には、牧口は親類を頼りに北海道の小樽に移り住みました。そこから1889年4月に札幌の北海道尋常師範学校に入学するまでの期間について、詳細は分かりませんが、小樽警察署の給仕をしながら独学で学んでいたようです。北海道尋常師範学校での学びが、1893年3月に同校を卒業してからの牧口の仕事や著作に大きな影響を与えていることは言うまでもありませんが、同様に、北海道の小樽に移り住んでからのおよそ5年間にわたる、働きながら学んだ経験は、自身の教育学を考えるにあたって重要な要素として構成されていたのではないかと思うのです。

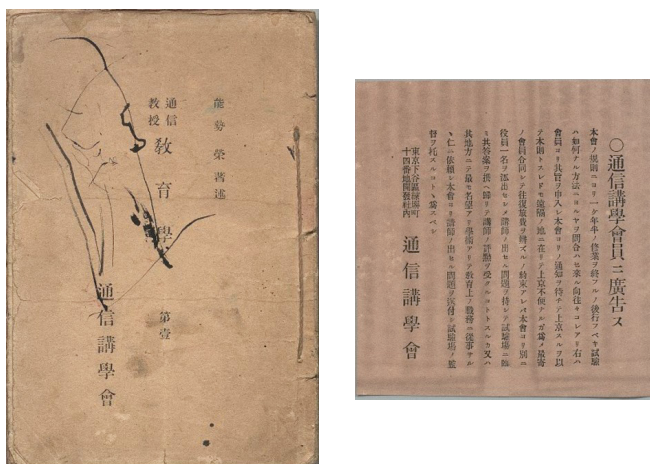
師範学校卒業前に名を常三郎に改め、卒業後は学校教員として授業・運営を行いながら、精力的に研究を続け、北海道教育会の機関誌『北海道教育雑誌』に論考を投稿しました。同会の理事や同誌の編集員も担当しています。牧口常三郎名義の文章は、上京する1901年4月までの間、同誌に計61回掲載されています。また、師範学校在職中には、難関の文部省中等学校教員検定試験（通称「文検」）を受験し、北海道出身者としての合格は、地理地誌科で第1号、教育科で第2号となっています。そして1903年10月にはベストセラーとなる『人生地理学』（文会堂）を出版しました。

## 日本の通信教育の始まり

日本で大学レベルの通信教育が始まるのは、英吉利法律学校（後の中央大学）、東京専門学校（後の早稲田大学）、通信講学会（開発社）などから講義録が発行された1886年頃とされています。

この中では、英吉利法律学校が最も早く、1885年から講義録を頒布しています。英米の法律という新しい知識を教えるにあたって日本語の教科書が存在しないことが講義録を作る最大の理由でありました。欧米諸国の学問を直輸入していた時代から、その学問を日本人が咀嚼し自説の展開を行うという知の転換がその背景にはあります。

講義録は教室で講義を受けるのと同等の内容を学習できるようにした刊行物で、高等教育の分野から始まり、次いで中等教育でも講義録の発行は盛んになりました。月謝を払い、毎月印刷物を届けてもらって学ぶのです。完結した講義録は単行本として購入することもできました。学校に来ることのできない学習者に学習の機会を提供することを目的とした講義録は、近代的な印刷・出版業の発展と全国的な郵便制度を前提として成立しました。とりわけ通信講学会は、アメリカの通信大学に範を取った通信教育の嚆矢として一時は2万人の会員を獲得しましたが、学位資格の認定が無く、学校という組織体を持たなかったために継続が困難になり、1891年に活動を停止しています。しかし、同会で『政治学』のテキストを担当した高田早苗は、この講義録執筆の経験から着想を得て、有名な早稲田大学講義録の事業に着手するのです。そうして日本の通信教育が普及していきました。



通信講學會の広告と講義録。池田大作記念創価教育研究所所蔵。

### 牧口常三郎の学び

牧口の樽時代の学びを書誌的に解明しようとした斎藤正二『若き牧口常三郎』（上巻、第三文明社、1981年）では、当時発行された新聞・雑誌・百科全書・教育雑誌・通信講義録をリストアップしながら、接触し得た可能性のあるもののひとつとして通信講學會の講義録に着目しています。通信教育とのつながりは樽時代からあったのかもしれませんが、「勉強給仕」というニックネームを得るほど読書をしていたと言われる牧口は、どのような学習観をもっていたのでしょうか。牧口がペンネームで書いた「少女の自修」（『少女界』第2巻第2号、金港堂、1903年2月、2～6頁）という作品にはそのヒントがあります。同作品では少女に対して、普段から、教師に就かないでも自分一人で学問を修める工夫をすることを勧めており、“いつも一冊程度は懐に入れておいてほしい”と特に書物に親しむことを推奨しています。このアドバイスは、牧口の経験に裏打ちされたものなのでしょう。

## 2. 牧口常三郎と通信教育

### 大日本高等女学会の設立

1903年に『人生地理学』を出版した牧口常三郎は、その後『教育』（茗溪会）の編集、弘文学院の講師、私立東亜女学校の講師などの職務の傍ら、1905年5月28日に女性のための通信教育団体として大日本高等女学会を設立しています。

1899年2月8日には、高等女学校令が公布されます。この法令によって、高等女学校は女子中等教育機関として独立した学校令をもって設置運営されることになりました。以降、高等女学校は著しい振興がみられることとなりますが、すべての入学希望者を受け入れるまでには至りませんでした。

大日本高等女学会は、高等女学校への通学が困難であったり、学資に困窮したりして、女子中

等教育を満足に受けることのできない女性たちに修学の機会を提供しました。月謝は廉価で、修学期間は2年間（後に1年半に短縮）。牧口は主幹として、講義録『高等女学講義』（発行兼編集人は牧口常三郎）を発行しました。講義録の執筆陣も著名な教育家を揃え、内容は分かりやすく行き届いたものとなっています。この講義録は月2回発行で、第1号から第12号までの1学年分のテキストが半年間で配布されています。講義録では、牧口は第2学年の外国地理を担当しました。また同会が発行した月刊雑誌として『家庭楽』があります。『家庭楽』は、立ち上げたばかりの大日本高等女学会をアピールし、入会希望者を増やす役割を持っていました。

『高等女学講義』は、各科目の内容だけでなく、小説なども掲載されていました。その中に教育家・豊原南村の「小説蘭子」という作品があります。これは、蘭子という女性が大日本高等女学会で学ぶ様子を描いたものです。編者の牧口はこの作品について「全国に亘る熱心なる我会員の情態を写して遺憾なきもの、如し。」（豊原南村「小説蘭子」（『高等女学講義』〈第5回〉第2学年第3号、大日本高等女学会、1907年11月）とコメントを付しています。

主人公である17歳の女性・岩谷蘭子は山間の辺鄙な場所に住んでいて、毎日、両親と家事や畑仕事をして暮らしています。東京に遊学中の姉と仙台の中学校に在学中の弟がいるのですが、蘭子はきょうだいの学費を考えて進学を踏みとどまりました。ある時蘭子は、姉が東京から送ってくれた『家庭楽』を愛読しているうちに、大日本高等女学会の存在を知ります。姉から同会の評判を聞き、早速入会を決意して、節約して貯めたお金を当てて入学します。朝起きて家事の合間に講義録を読み、人が昼寝を貪る時に調べ物をし、夜は人の雑談の間に復習して、日夜怠らず学習を続けました。蘭子の成功を聞きつけ、同会の会員や卒業生が集まるようになり、同会の支部が結成されます。支部会員は定期的に交流を続けて互いに学習を助け合いました。そして、蘭子は女子高等師範学校に入学することを決意します。それは、高等女学校の通学課程で学んだ女性より、却って講義録等で独学した者が確実な知識を備えていて、実際的であるという評価があることを知ったからです。ここに何か教育方法等の原因があり、この原因を明らかにするには教育者になるしかないと考えました。

以上がこの作品のあらすじです。小説の体裁をとる形でロールモデルの蘭子を通して同会の理想像が描かれています。

また、この作品の中では、学習の方法に注意するようにと具体的に項目を挙げて呼びかけられています。その一つを紹介すると、“一時に多くを学ぼうとせずに、少しずつ継続して学習し確実な知識を得るようにすること。その次に復習をして、応用することが大切である”ということが述べられています。現代でも通用する見解といえるでしょう。

『家庭楽』は1907年11月頃までは誌名が確認できます。以降は後継誌の『大家庭』がその機関雑誌的役割を担ったようです。「大家庭」はちょっと聞き慣れない言葉かもしれませんが、当時、小集団や学校、国家などを形容して「大家庭」と表現することがあったようです。『大家庭』は、1908年8月頃に『女子学芸雑誌』と改題されますが、この時期には牧口は病を患っていたようで同会から離れています。



『高等女学讲义』1学年分のテキスト。同研究所所蔵。

### 通信教育の興隆

1907年2月刊の『学生タイムス』（学生タイムス社）には、「各種講義録の反面」という記事が掲載されており、大学や各分野の講義録を批評しています。その中で大日本高等女学会のほか大日本女学会、大日本淑女学会、帝国高等女学会、家庭女学会といった女子通信教育の各団体も取り上げられています。

記事によると大日本高等女学会は「講義の内容平易にして懇切趣味をも具備し編輯の苦心思ひやらる。また時々府下に会員の集会を催し質疑応答実地演習をなすつゝありとか。信用するに値す。」（天使救世軍「各種講義録の反面」〔『学生タイムス』第2巻第3号、学生タイムス社、1907年2月、10頁）と当時のほかの女子通信教育団体と比べても高い評価を得ていたようです。各団体の修学期間は多少違いがあるものの、1年～2年間となっています。通学課程の高等女学校は4年制なので、その約半分の期間で同程度の内容を学ぶことができます。いつでも、どこでも学べる通信教育は、学ぶ機会を得ることができなかった女性にとって希望の存在だったのでしょ。また、それは女性に限った話でもありません。同時代の新聞、特に地方紙を見ると、ほぼ毎日と言ってよい割合で、大学講義録等の通信教育の広告が掲載されているのを確認することができます。それだけ反響が大きく、需要の見込める事業だったということが言えるでしょう。



大日本高等女学会が発行した雑誌。同研究所所蔵。

## 半日学校制度論

牧口常三郎は、従来の一日の内容を半日で修めるようにし、半日学び、半日働くという「半日学校制度論」を1932年に出版した『創価教育学体系』第3巻の中で提唱しています。創価教育学の研究は、一日の内容を半日に修めることができるようにするためにありました。この半日学校の構想を牧口はすでに1906年に『教育界』（金港堂）という教育雑誌の中で語っています。大日本高等女学会を立ち上げた翌年の事です。牧口は、どこから一日の内容を半日で修めることができるという根拠を得たのでしょうか。一つの仮説として、大日本高等女学会ならびに通信教育の成果によるものということが考えられます。実際に、大日本高等女学会では、通学課程で4年間をかけて学ぶ高等女学校の課程相当の内容を、2年間あるいは1年半で修学することに成功していたわけです。もちろん、成功事例ばかりではないと思いますが、牧口が、この成功の原因を究明して教育界に貢献しようとしていた、という見方はあながち的はずれとも言えないでしょう。そのように仮説を立てて「小説蘭子」を読むと、蘭子と牧口の問題意識が通底していることに改めて気づかされるわけです。

## 3. 若き戸田城聖とその時代

### 若き戸田城聖

戸田甚一（後の戸田城聖）は、1900年2月11日に石川県江沼郡塩屋村（現在の加賀市塩屋町）で生まれました。1904年には、家族と共に北海道の厚田村（現在の石狩市厚田区）へ移住しています。1906年には、厚田尋常高等小学校尋常科に入学し1912年に同校尋常科を卒業しますが、ちょうどこの時期に、6年制の義務教育が成立しました。1900年の小学校令改正によって保護者は学齢児童を就学させる義務を負うことになり、公立小学校の授業料は原則無償になったことで、学齢児童の就学率は9割以上になりました。小学校の普及と就学率の上昇を背景に、1907年の小学校令改正で義務教育の期間は4年間から6年間に延長されます。

甚一は、尋常科を卒業後、高等科に入学。1914年に高等科を卒業した後は、厚田村で家業を手伝い、その後、家族の勧めで札幌の小六商店に入社します。小学校を卒業した14歳から18歳まで間には、商業的大成を志した甚一の人知れぬ奮闘がありました。最終的には商業で身を立てたいのですが、目先の進路として、学問を修めて教員の道を行くという選択肢もあり葛藤しています。また、1914年に日本は第一次世界大戦に参戦し、1918年に大戦が終結しました。世界の動乱の中で、働きながら学び、人生の分岐路で懊悩し、自分の使命の道を切り開いていく軌跡が彼の手記には刻まれています。

1917年に尋常小学校准教員検定試験を受験し合格。1918年4月に小六商店を退社した後は、夕張町で小学校の教員を務め、尋常小学校本科正教員検定試験にも合格しましたが、向学心のままに1920年に上京。この頃から甚一は自身のことを城外と名乗ります。上京後、東京での職を得るために当時西町小学校で校長を務めていた牧口常三郎と出会うこととなります。この出会い

から、数々の苦難を共にした牧口と戸田の間には師弟関係が形成され、戸田のその後の人生を導くことになりました。

小学校の教員として職を得る傍ら、受験予備校に通い、1922年に高等学校高等科入学資格試験に合格。小学校を退職後、牧口の助言により、幼稚園の一室を借りて補習塾を始めます。1925年に中央大学予科第一部に入学し、間借りしていた幼稚園の近くに、補習塾の建物を建てて「時習学館」を開設。1928年に中央大学予科第一部を卒業し、本科経済学部に入學。

1927年頃から新聞等では中等学校入学試験の「入学難」、「試験地獄」が盛んに報道されるようになります。その対応として、文部省は1927年に中等学校の試験を全廃し「考査」に改めます。入学者の選抜は、出身小学校長の報告書である「内申書」、口頭試問による人物考査、身体検査の3つの方法で行われることになりました。しかし、この変更によって「試験地獄」が終わることはなく、新たな混乱も生み出しました。戸田はこの状況に対して1929年に『家庭教育学総論中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂）で一石を投じました。

1930年3月に牧口の教育学理論の普及を支援する創価教育学支援会が発足した頃、戸田は中央大学を中退しています。戸田は『創価教育学体系』の編集・出版に全力を以て応えました。また同年6月には、ベストセラーとなる戸田城外著の『推理式 指導算術』（創価教育学支援会）を出版しました。同書背表紙タイトルの「推理式 指導算術」の上部には「創価教育学原理による」という文章が記載されています。同年11月に『創価教育学体系』第1巻（創価教育学会）が出版されますが、その前に、創価教育学を応用した成果が戸田の手によって、一早く世に送り出されているのです。『推理式 指導算術』に序文を寄せた牧口は次のように述べています。「余の説かんとする所は、理論上の確信に止まつて其の真理の実証は未だ余の企図する能はざる所なりしも、兼て余の学説を支持せられたる戸田城外氏が多年の経験を包容せる本書によりて我学説の万遺憾なき実証と普遍性を見しは余の最も愉快とするところである。」（牧口常三郎『牧口常三郎全集』第9巻、第三文明社、1988年、204頁）。



『推理式 指導算術』の表紙と背表紙。同研究所所蔵。

## 入学試験と学歴主義の時代

日本は「入学試験」の国と言われています。中等教育から高等教育まで上級学校への進学に入学試験がつきまとうのは日本特有のこのようです。主な理由として2つのことが挙げられます。ひとつ目は小学校から大学まですべての段階の学校が一斉に作られてしまったために、上級の学校はそれぞれ独自に学校の教育レベルに合わせて入学者を選ぶ必要があったこと。ふたつ目は入学定員の問題。つまり、学校教育全体の未発達による過渡的な選抜の方法として入学試験が始まったということです。

そして、明治末頃には入学試験が学歴主義と結び付き、永続的な制度として根を下ろしていきます。学校の発行する卒業証書（学歴）は、企業によって採用等の基準として利用されるようになり、企業への就職をめざす若者は、よりよい学歴を求めて学歴獲得競争の中に身を投じていきました。こうして入学試験が学歴獲得競争の場に変質していきます。

明治末期から大正初期には高等小学校を卒業して上級学校に進学するのは2割程度でした。中等学校に行けない高等小学校卒業生のエネルギーのはけ口として、働いて学資を得て学問をする「苦学」、中学校講義録などの通信教育による「独学」のブームが起きました。とはいえ、どちらもその多くが脱落していく困難な道でありました。「苦学」の典型的なルートは、上京し遊学するというものですが、当時盛んに出版されていた苦学ハウツー本のおかげもあってか、東京に人のつながりが全くない状態でも「苦学」が可能になっていました。

中学校講義録は上京遊学できない者、上京の準備中の者によく読まれていたようです。また、試験の内容が中等普通教育程度である尋常小学校准教員検定試験、尋常小学校本科正教員検定試験のテキストとしても利用されています。若き日の戸田も手に取ることがあったのかもしれません。

## 戸田甚一の学び

小六商店での戸田の主な仕事は荷車に商品を積んで得意先の小売店に届けることでした。就業時間の前後で勉強し、働きながら学び続けました。また仕事を大急ぎで終わらせて、野原へ行って荷車を放り出して、寝転んでよく本を読んでいたようです。自分の目的と現状とのギャップに悩む中でも、本を読み続けています。後年彼は、「青年よ、心に読書と思索の暇をつくれ」という文章を発表しますが、その中で次のように述べています。「読書と思索のない青年には、向上がない。青年たる者は、たえず向上し、品位と教養を高めて、より偉大な自己を確立しなければならぬ。それがためには、吾人は、「読書と思索をせよ」と叫ぶものである。（中略）一日を総計すれば、一時間や、二時間の読書の時間は、必ずあるはずである。また、二十分や三十分の思索の時間は、ないとはいえない。ただし、問題はその習慣をつけるか、つけないかということにある。」（戸田城聖『戸田城聖全集』第1巻、聖教新聞社、1981年、158～159頁）。この言葉は戸田の経験を踏まえたものと考えられます。思索するには読書が不可欠です。読書の習慣は、思索の習慣でもあるのです。戸田が働き、思索し、学んだ軌跡は前述の手記にも見受けられます。読書と思索の習慣が戸田の青年時代を形成していったと言えるでしょう。

## 4. 戸田城聖と通信教育

### 戸田の教育事業

戸田甚一（城外）は、牧口常三郎の『創価教育学体系』の出版を支えながら、数々の教育事業を行っています。その一つに「時習学館」があります。元は幼稚園の一室で始めた補習塾でしたが、1925年に幼稚園の近くに建物を設けて本格的な塾経営に取り組みました。基本的には受験志望の小学生を対象に補習授業を行っています。1929年頃の「時習学館」の通知簿には「小学校中等学校の補助機関として最<sup>ま</sup>前の努力を尽すと共に、吾人自らも教育革新の<sup>たいはい</sup>大旗を高く掲げて聊か我が国教育の進展に貢献せんとするものである」（『創価教育の源流』編纂委員会編『評伝戸田城聖』上巻、第三文明社、2019年、185頁）と、その目的が掲げられています。前述の戸田城外『家庭教育学総論 中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（城文堂、1929年）および同著『推理式 指導算術』（創価教育学支援会、1930年）も「時習学館」での経験を基に執筆されたものです。「時習学館」では中等学校への進学希望者のために模擬試験を始め、1929年頃には「時習学館」以外の生徒にも対象を広げた「東京府総合模擬試験」を主催しています。

また、戸田は1929年に出版社である城文堂（1934年に日本小学館と社名を改める）を設立します。この出版社からは、現在確認できている範囲ではありますが、数十冊の学習参考書を出版しています。その多くは、戸田が1930年に出版したベストセラーの『推理式 指導算術』の「推理式」を各科目に応用したものです。読方、理科、歴史、地理等の科目で推理式の学習参考書や学習帳が出版されています。さらに、1930年には教員らを対象にした教育雑誌『新進教材 環境』を刊行します。同誌は、『進展環境 新教材集録』、『新教材集録』、『新教』、『教育改造』と順に改題を重ねますが、『新教』辺りからは創価教育学会のメンバーの機関誌的な位置づけになっていきます。この教育雑誌には、創価教育学に基づいた学習指導案も複数掲載されました。さらに1940年には、子どもを対象とした月刊の学習雑誌『小学生日本』（五年生用と六年生用）を刊行しました。

### 戦時下の学習雑誌

戸田はなぜ戦時下において学習雑誌を刊行したのでしょうか。そもそもこの時期に雑誌を刊行すること自体極めて困難なことでした。用紙の確保や検閲といった幾重もの制約を乗り越えなければ成すことのできない事業です。『小学生日本』が創刊された1940年は「紀元二千六百年」や「八紘一字」といった戦意昂揚のスローガンが巷にあふれ出す画期であり、もちろん学校教育にも戦時下の影響が色濃く表れています。学帽は戦闘帽に、制服の色も国防色（茶褐色）になっていきます。翌年4月に小学校は「国民学校」と改称され、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的」（国民学校令第1条）とする教育が行われるようになります。そして同年12月には日本軍の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まるのです。

『小学生日本 五年』創刊号に掲載された戸田の「創刊号のことば」には、「『小学生日本』は、

楽しんで読んでためになる読物と、読む学習と一緒に問題を解きながら記入して行ける勉強室を持つ、新しい雑誌です。新しい時代には、新しい精神の糧が必要です。」(『小学生日本 五年』第1巻第1号、日本小学館、1940年1月、1頁)とあります。

この「勉強室」とは誌上では「明るい教室」または「明るい勉強室」と名づけられています。『小学生日本 五年』創刊号を見ると、「明るい教室」には、小学五年程度の修身科、読方科、算術科、国史科、理科、地理科、綴方科、図画科の内容と問題が掲載されており、読者は問題を解いて記入することができます。また、「明るい教室」の内容についてのみでなく国定教科書についての質問もすることができ、各科の担当者と郵送でやりとりをすることができました。各科のほかには「休憩室」が設けられ、室内のあそび、クイズ、マジックの手引き、笑い話等が紹介されています。「明るい教室」の最後には、切り取り線の入った「誌上考査問題」が付いています。力試しに問題を解いて切り取って応募すれば、点数によっては、メダルや記念品をもらうことができます。応募した解答も返送用の切手が同封されていれば、添削して、指導・批評した上で返送するといった懇切丁寧なものでした。「誌上考査問題」の参加者は次第に増えていき毎回12000人を超えるまでになっていきます。この「明るい教室」は、誌面の約3分の1を占めています。まるで、かつてどこにでもあった“明るい教室”を誌上で再現しようとしたかのようです。

戦時下文学・戦時下ジャーナリズム研究家の高崎隆治氏は、戸田の学習雑誌事業を「教育が崩壊を始めたというより、崩壊した瓦礫の中に放り出される子どもたちをどうやって救出するか、一人でも二人でも救うにはどうすればいいかというのが、この時の戸田城外の緊急の課題であった」(高崎隆治『戸田城聖 1940年の決断—軍国教育との不屈の闘い』第三文明社、2002年、110頁)と位置づけています。戦時下の教育の崩壊を目の当たりにした戸田は、なんとしても子どもたちに“新しい精神の糧”を贈りたかったのでしょう。とはいえ、それは容易な道のりではありませんでした。子どもたちに「明るい教室」を届けるためには、用紙の調達はもちろん、内容についても検閲を乗り越えるために様々な苦心があったと推測されます。執筆者の選択にはじまり、目次の編成、時局読物や枕詞として国家を礼賛する文言を入れるなど、戦時下で雑誌を発行するための妥協を最小限にしながら、子どもたちに“新しい精神の糧”を届け続けました。1940年10月に『小学生日本』は、「五年生用」と「六年生用」を統合せざるをえなくなってしまう。 「誌上考査問題」は「誌上常識考査問題」として誌面に残りましたが、各学年の内容に応じて掲載されていた「明るい教室」は誌面から無くなってしまいました。それでも戸田は「明るい教室」を諦めませんでした。別冊附録として作成し、送料分の切手を同封して申し込めば、各学年用の「明るい教室」が子どもの元に届くようにしています。

しかし、戦時統制の下で学習雑誌を刊行し続けるのは至難であったのでしょうか。『小学生日本』は1941年に『小国民日本』、1942年頃に『少国民日本』と誌名を変え、1942年4月頃に廃刊になり、戸田の学習雑誌事業は2年余りで幕を閉じました。



『小学生日本 五年』および『小学生日本 六年』の第1巻第1号。同研究所所蔵。

### 戦後の通信教育事業

戸田は、1943年7月6日に治安維持法違反および不敬罪の容疑で検挙されます。同日に牧口も同容疑で検挙されています。獄中生活は続き、牧口は1944年11月18日に獄中で逝去。戸田は、1945年7月3日に出所した後「城聖」と名乗るようになります。同年8月15日に日本は敗戦を迎え、そのわずか5日後の8月20日に戸田は日本正学館の事務所を開き、通信教育の事業に着手しました。戦後に戸田が初めて手を付けた事業が通信教育でした。戸田が始めた通信教育の内容は、当初は、中等学校程度の数学と物象（物理・化学・鉱物学など）の学び方、考え方、解き方を教えるものでした。教科書の主要問題を月2回解説し、月1回試験問題を添削する。そして、この解説を綴じ込めば参考書となるように配慮されています。翌年には、英語の読み方、話し方、作り方も追加されました。翌年には、高等学校・専門学校の入試添削も始めました。反響は大きく、多数の応募が殺到しました。全国紙・地方紙にも何度も広告を掲載しています。

戸田の弟子である池田大作は、戸田の真実を描いた小説『人間革命』において通信教育の事業を始める際の心境を次のように吐露させています。「戦争が、どれほど最悪になろうと、あるいは敗戦という事態にいたったとしても、ひたすら太陽に心に向ける無垢な少年たちの向学心を、彼は信じることができた。学問に渴いている少年たちの心を、彼は思いやった。“渴ききっている心に、学問を送ろう。それには、現状において通信教授以外に方法はない”」（池田大作『人間革命』第1巻、聖教ワイド文庫、2013年、70頁）。

戸田は『小学生日本 五年』の「創刊のことば」で「新しい時代には、新しい精神の糧が必要です。」（前掲『小学生日本 五年』第1巻第1号、1頁）と述べていますが、戦時下で教育が崩壊した暗い時代も、終戦直後の混迷の時代も一貫して子どもを信じ、子どもに“新しい精神の糧”を届け続けました。その手立てが通信教育でした。戸田の心はどこまでも子どもたちに寄り添うものであったのです。

## 5. 若き池田大作とその時代

### 若き池田大作

池田太作（後に大作に改名）は、1928年1月2日に東京府荏原郡入新井町（現在の東京都大田区大森北二丁目）に生まれました。1934年には、羽田第二尋常小学校へ入学し、1940年に同校を卒業します。同年4月に羽田高等小学校へ入学しますが、在校中に羽田高等小学校は、萩中国民学校と改称されます。国民学校令により1941年4月から小学校（尋常科6年間・高等科2年間）は国民学校へと変わりました。これは、単に名称の変更に留まらない変化で、初等教育が戦時体制の下に刷新されたことを意味しています。同年12月には太平洋戦争が始まります。国民学校の教育は、「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」（国民学校令第1条）とあるように、教育勅語に示された国体の精華と臣民の守るべき道（皇国の道）を修練させることを目指すものでした。

1942年に萩中国民学校を卒業した後は、蒲田の新潟鉄工所へ入社し、同社内の青年学級で学びました。1945年の終戦後、新潟鉄工所は閉鎖され、同年9月に東洋工業学校（1946年5月に東洋商業学校へ改称）の夜間部に中途（二年度）入学をします。戦後、価値観や社会の混迷した状況の中で、青年たちは誰もが、どう生きるかという人生の命題に直面することになりました。また終戦直後は、押さえつけられてきた向学心があふれ出ていたような時期でもあります。戦争で多くのものが失われはしましたが、青年たちは寄り合い、読書会を開くなどして飢えた心を満たしていました。池田もその一人でした。地域に住む青年たちと読書サークル「郷友会」で、ある本の一節の解釈で議論したり、彼らと一緒に、地域の住民や子どもが気軽に本を読めるように貸本屋「草水文庫」の運営も行いました。その頃、友人から「生命哲学についての会」があると誘われて参加し、出会ったのが生涯の師となる戸田城聖です。1948年3月に東洋商業を卒業後、大世学院政治経済科夜間部に入学し、1949年1月には戸田の経営する日本正学館へ入社します。

当時、日本正学館が刊行していた少年雑誌『冒険少年』の編集を担当しますが、経営状況が悪化し、誌名を『少年日本』に変更するなど、最善を尽くしましたが廃刊となってしまいます。戸田は、既に会社の主力となっていた池田に対し、大学の夜間部を辞めて業務に注力してもらうよう説得しました。代わりに、学問的なことについてはすべて個人教授するからと申し含めて、戸田と池田の個人教授、いわゆる戸田大学が始まります。池田は、戸田大学を振り返って次のように述べています。「私自身、ほとんどの教育を、私の人生の師・戸田城聖の個人教授から受けました。／約十年の間、毎朝、そして、日曜日は朝から一日中、個人教授を恩師から一対一で、歴史、文学、哲学、経済、科学、組織論等々、万般にわたって受けたのであります。」（池田大作『池田大作全集』第101巻、聖教新聞社、2011年、427頁）。

## 戦後日本の大学通信教育

戦後、1947年の教育基本法によって教育の機会均等が明記され、大学等の高等教育に対して門戸が開かれることになりました。大学通信教育は、同年の学校教育法第45条の「高等学校は、通信による教育を行うことができる」を同第70条より大学に準用させるところから始まり、「通信教育認定規程」、「大学通信教育基準」の制定を経て整備されていきます。戦前においても高等教育における通信教育は講義録という形で行われてきましたが、基本的に大学卒業資格を保証するものではありませんでした。1948年には、法政大学、慶應義塾大学、中央大学、日本女子大学、日本大学における通信教育の開設が認定されます。この段階ではまだ社会通信教育として認定されていたわけですが、1950年3月14日付で、この5校に玉川大学を加えた6校が学校教育法に基づく正規の大学教育の課程として認可されます。ここで初めて、大学通信教育で卒業すれば通学課程と同じく学士号を取得できるようになったのです。こうして働きながら通信教育で学び、大学卒業資格を得るということが可能になり、戦後の勤労青年や戦争によって学業を諦めた多くの青年に迎えられて、大学通信教育は大きな反響を呼びました。

## 池田大作の学び

若き日の池田の学びの特徴をあえて挙げるとするならば、読書を通じた人格形成と言えるでしょう。池田大作『完本 若き日の読書』（第三文明社、2023年）などを見ても戸田と出会う前から読書家であったことが窺えますし、まさしく戸田大学は読書を通じた訓練の場でもありました。創価大学中央図書館に1997年に開設された池田文庫は池田の約7万冊にわたる蔵書の寄贈がもとになっています。このことから、池田は最初からあらゆる本を自由自在に読みこなしていたかのように想像してしまうかもしれません。しかし、池田が10代後半頃から付けている雑記帳を分析していくと、その想像を修正せざるを得ないことが分かります。前掲『完本 若き日の読書』には、雑記帳に書かれた本の抜き書きが「読書ノート」として収録されています。この「読書ノート」に記載されている本の抜き書きを始めるのほうから並べてみると、「一書の人を恐れよ」、「書を読み、書に読まれるな」、「今日の大学は、書籍の蒐集しゅうしゅうなり」といった読書に関する格言が続きます。順に、ラテン語の格言、出典は不明ですが孟子の「悉く書を信ずれば即ち書無きに如かず」の註釈としてよく用いられる言葉、トマス・カーライルの言葉となります。この格言を3つとも収録している本として該当するのが田中菊雄『現代読書法』（柘谷書店、1941年）という読書ガイド本です。1987年に出版された同書の講談社学術文庫版で解説を書いた紀田順一郎氏によれば、著者の体験に基づいて勉強の仕方が具体的に記されており、戦前や戦後にかけての読書論のほとんどが精神論や自己の読書回想などでお茶をにごす一方で、こうした傾向に飽き足りない独学者（自ら学ぼうという人々）に熱い支持を受けていたようです。当然、手にした読書ガイド本は他にもあるでしょうが、10代後半頃の池田が、自分の人生と向き合い、読書を始めるに当たって、「何を読むか」、「どう読むか」について優れたガイドを必要としていたと考えるのはごく自然なことと考えられます。田中菊雄は同書の中で次のように述べています。「今日の大学は書

籍の蒐集なり」といつたカーライルの一言の意義は深い。今日は如何なる業務に従事しようと、如何なる山間僻地に居らうと、書籍によつて大学教育を受け得るのである。(中略)されば各人は自らの置かれた境遇に於て、職域に於て、迷ふことなく、自己に最善の大学教育を自らの手を以て自らのために獲得すべきである。而うして之を可能ならしむるものは実に書籍である。」(前掲『現代読書論』柁谷書店、1941年、24～25頁)。この言葉は現代の大学教育を考える上でも重要と言えるでしょう。



田中菊雄『現代読書法』柁谷書店版と講談社学術文庫版。筆者所蔵。

## 6. 池田大作と通信教育

### 池田の教育事業

牧口常三郎は戸田城聖と共に、創価教育学の樹立と普及を目指し、著述活動や講演等を行っていますが、自身の教育学理論を基にした学校設立についても次のように語っていたようです。「将来、私が研究している創価教育学の学校を必ず僕が、僕の代に設立できないときは、戸田君の代で作るのだと、小学校から大学まで私の研究している創価教育学の学校ができるのだ。」(『月報』『牧口常三郎全集』第6巻、第三文明社、1983年、6頁)。

学校の設立を託された戸田は、少年雑誌事業から撤退し、自身の経営が最も厳しい状況の中、日本大学の食堂で大学設立について「大作、創価大学をつくらうな。私の健在なうちにできればいいが、だめかもしれない。そのときは大作、頼むよ。世界第一の大学にしようではないか」(池田大作『青春対話 普及版』2、聖教新聞社、2006年、177頁)と語っています。1950年11月16日のことです。その年は、戸田が池田に大学の夜間部を辞めて、業務に注力してもらうよう説得し、個人教授を約束した年でもあります。また、1955年1月22日に戸田は「今に学校をつくるよ。幼稚園から大学まで一貫教育の学校を。日本一の学校をね(趣意)」(『創価教育の源流』編纂委員会編『評伝 戸田城聖』下、第三文明社、2021年、273頁)とも発言しています。

池田大作は、戸田城聖から個人教授という形で約10年に亘って間断なく薫陶を受けてきまし

た。その個人教授は、始業前の早朝の時間を利用して行われることもあれば、実務の中であったり、移動中であったり、時には休日の歓談の中であったりと、時と場所を選ばず、縦横無尽に、常に戸田の人格と共にありました。これを池田は、戸田大学と呼んでいます。

戸田大学の薫陶は、1958年4月2日の戸田の逝去間際まで続けられました。その数年後、牧口、戸田の志を受けついで池田は、自身の「最後の事業は教育である」と定めて、次々と学校設立の具体的な手立てを打っていきます。1964年6月30日に1万人の大学生の前で創価大学の設立を発表し、1965年11月に創価大学設立審議会が発足。1968年に創価学園が開校し、1971年に創価大学が開学します。その後も、池田によって着実に創価教育の学び舎は設立されていきます。

池田は、「『創価教育』、すなわち価値創造を掲げた一貫教育のシステムは、私が受けてきた、[戸田城聖による]このような人間教育を、未来の世代にも贈りたいとの願いを込めて創立したものであります。」(池田大作『池田大作全集』第101巻、聖教新聞社、2011年、408頁)と、述べています。



文學乃池

### 創価大学通信教育部の「開学」

池田の小説『新・人間革命』第23巻の「学光」の章には、通信教育部の開学と草創期の様子が描かれていますが、できうる限り歴史的事実としても押さえておきたいと思います。池田は、1969年5月3日に創価大学の建学の精神「人間教育の最高学府たれ」、「新しき大文化建設の揺籃たれ」、「人類の平和を守るフォートレス(要塞)たれ」を紹介した後に、夜間部あるいは通信教育をなるべく早く開設したいという希望を吐露しています。

大学の理事を務めた岡安博司氏は、「それから、通信教育部についてです。これは何としてでもつくらなければと考えておりました。創立者のご構想は、牧口先生の創価教育の柱である、半日学校制度を現代に具現化する「通信教育部」の開設を一日も早く実現することになりました。それは、時代が強く求める「生涯教育」にも対応する重要課題だったのです。文部省に行き、経・法・文3学部の開設と同時に、通信教育部をつくることにつき相談に行きました。」(岡安博司「創

創価大学の開学を語る一創立者の大学構想を中心に―（『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2005年、178頁）と証言しています。1971年に創価大学は開学と同時に通信教育部を開設するつもりだったのですが、前例が無いため断われ、卒業生が出てから再度申請をすることになりました。ただし、岡安氏は、既設の学部を土台にして通信教育部を作るという前例を踏襲する判断は、開学1年目で通信教育部も開設した場合の混乱を考えると、結果的に間違っていないと述べています。

第1回目の卒業生を待って、ついに1976年5月16日に通信教育部が「開学」します。当日、開学式に池田は参加することが叶わなかったため、通信教育部開学式のメッセージをテープに吹き込んで届けました。「5月16日は、重大な歴史の日となりました。晴れやかな開学式、誠にありがとうございます。また、皆さんの入学を心よりお祝い申し上げます。通信教育部の設置は、創価大学設立の構想を練りはじめて以来の、私の念願でありました。」（池田大作「創価教育体现の第一期生たれ——働きながら学ぶことこそ適切な環境条件——」『学光』第1巻第4号、創価大学通信教育部、1976年7月、3頁、傍点引用者）で始まるメッセージを、原稿の代読ではなく池田自身の声で聞いた通信教育部の第一期生は、感激したそうです。

さらに池田がどれだけ通信教育部を重視していたかを理解するために、「開学」という言葉に着目したいと思います。大学が通信教育部を新たに設ける場合、一般的には「開設」や「設置」などの表現が用いられます。実際、上記のメッセージの中では、通信教育部の「設置」とも表現されているので、見逃してしまいがちですが、池田は、通信教育部を「開学」という位置づけで考えているのです。「開学」は通常、新しく学校が創立される時に用います。池田は通信教育部の20周年特別寄稿で、間違いなくはっきりと「通信教育部の設置は、創立当初からの私の念願で、いわば『第二の開学』ともいうべき慶事でした。」（池田大作「開設20周年特別寄稿 真の教育は働き学ぶ人生の中に」『学光』第20巻第2号、創価大学通信教育部、1995年5月、4頁）と、創価大学の通信教育部を「第二の開学」と意義付けているのです。大学と同じ4月2日ではなく、あえて5月16日に開学式を設けたのも「第二の開学」という意識からだったのではないかと推察することができます。



学光の碑

## 通信教育部の草創期

池田の開学式のメッセージは、「どうか第一期生の皆さんこそ、通信教育部の創立者であります。それを忘れないでいただきたい。開拓の道は険しくも、その向学の軌跡は、創価大学の名とともに永遠に顕彰されていくことでありましょう。」（前掲「創価教育体现の第一期生たれ——働きながら学ぶことこそ適切な環境条件——」、6頁）という言葉で締めくくられていくのですが、この「皆さんこそ、通信教育部の創立者」という呼びかけは、学生のみでなく教職員をも含むもので、文字通り「創立者」としての奮闘を求めるものでした。

通信教育は、自学自習が基本です。学校に集まる機会は限られています。時間や場所を選ばない反面、通教生同士で顔を合わせることも少ないのです。また普段は、仕事や様々な活動に従事している通教生は、日々の生活に追われて学業が手に付かないことも稀ではありません。通信教育部は、全国に散らばっている通教生をどうやって組織し、創立者の池田に繋げていくのかという難題を抱えて出発していきます。

「創立者」のバトンを受けついで、ある職員は、全国を回って通教生のグループを組織していきます。これが基になって各地に光友会が作られていきます。また、ある職員は当時、大学や周辺に宿泊施設等が整っていない状況を考慮して、大学行事に参加する通教生を自宅に泊めてその奮闘を支えていました。そういった地道な奮闘の連続の中で、池田の通教生への思いが共有されていきました。

池田も「創立者たち」に応えるように、通教生を激励していきます。1976年8月18日、初めて迎えた第1回夏期スクーリングに駆けつけ、各教室を回って「第一期の通信教育の学生として、真剣なそしてまれにみる向学の姿を拝見して、私は創立者として大へんよろこんでいます」、「学長を通じて皆さん方の報告を受けています。私もひとしお大なる期待と、ひとしお大なる応援を惜しみません。私もそういう勉強をしてきました。1年間で普通の学生がやるところを、2週間前後で吸収できるよう努力してください。また来年も再来年もわが母校を愛して、学問を修得していただきたい。大変もり上がった教育であり、学問の最中にお邪魔して申し訳ありませんでした。お体を大切にがんばって下さい。」、「来年も再来年もわが母校を愛していただき、社会の労働と勉学を一致させてほしい。みごとな理想的な学問、学生としての卒業という栄冠を勝ちとっていただきたい」（「第1回夏期スクーリングダイジェスト」『学光』第1巻第7号、創価大学通信教育部、1976年10月、32～33頁）と声をかけています。

また同日、通教生の代表者らとブロンズ像の前で記念写真を撮っています。池田は、1971年の創価大学の開学に際して、アレクサンドル・ファルギエール作の天使と印刷工、天使と鍛冶職人の2つのブロンズ像を寄贈しました。そのブロンズ像の碑文には、それぞれ「英知を磨くは何のため 君よ それを忘るるな」「労苦と使命の中のみ人生の価値は生まれる」と刻まれています。理想（天使）と現実（労働者）の調和を象徴するこのブロンズ像は、創価大学の使命を見事に表現したものでした。天使と鍛冶職人のブロンズ像の前で記念写真を撮った通教生のグループは、その碑文から名前をとってその場で「通信使命会」と命名されました。北海道、東北、関東、東

海、中部、信越、関西、中国、四国、九州の各方面の代表として選ばれた男性5名、女性5名のメンバーで、通教生の模範として、連絡を取り合いながら卒業を目指し、卒業後も様々な分野で活躍し、毎年池田にその報告を届けていきました。

夏期スクーリング中に開催される恒例の学光祭も、第1回目は夏期スクーリングに参加してから初めて通教生も学光祭があることを知るような状況でした。そこから「創立者」として彼等は、呼びかけ、集まり、テーマから何からすべてを一から作り上げていきます。準備期間などはありません。スクーリングが始まってから残された日数で準備していきました。通教生および多くの教職員が準備にかかって、ついに1976年8月25日の夕刻に、第1回学光祭は開催されました。簡単に『学光』の誌面からその様子を拾っていくと、まず通教部長、学部長、学長の挨拶があり、創立者の差し入れが紹介されます。司会も玄人顔負けで大盛り上がりの様子です。滝山東寮グループによる大騎馬戦で始まり、朝霧寮グループの朝霧音頭、シュプレヒコールで「全員卒業するぞー!」、滝山南寮グループの応援団、「巨人の星」の主題歌に合わせて珍プレー実演、寮長の決意文朗読。女性職員の花笠音頭、男性職員のソーラン節。第二部は、本館ロビー（文系A棟）で模擬店やゲームコーナー、S201教室では飛び入りの歌合戦。そこには青春の横溢した姿、「創立者たち」の建設の奮闘を讃え分かち合う姿があります。

通信教育部は、孤独に学ぶ通教生を、教職員も学生も一緒になって励まし合いながら、卒業に向かうボートに乗せて、「池田先生の作った大学で学べる」という歓喜の灯火を頼りに、前進していきました。1980年3月には、通信教育部の第1回の卒業生を229名輩出しています。通信教育部の草創期に在籍していたある通教生は、次のように感想をもらしていました。「スクーリングに参加して一番驚いたのは、職員の方たちでしたね。職員の方たちが、とにかく池田先生の代行だと、学生第一、学生を大切に、『池田先生だったら〜?』、そういう思いで通教生に関わり、行動してくださっている姿に感動しました。それが私自身の一番学んだこと、人生の原点になりました（趣意）」。



天使と印刷工



天使と鍛冶職人

## 機関誌『学光』の誕生

このように、通信教育部の草創期の様子を知ることができたのは、通信教育部の機関誌である『学光』の存在によるところが大です。『学光』の創刊号は1976年4月1日に発行されました。通信教育部開学式の5月16日より前に誕生しています。ちなみに「学光」という命名は、池田によるものです。岡安氏の証言によれば、教員が集まって、ああでもないこうでもないで機関誌の名前を検討しましたが、意見がまとまらなかったため、池田に話を伝えると「即座に『『ガッコウ』でいきなさい」と。私は驚きました、「創価大学も学校ですが……」と言いましたら（笑い）、創立者は、「そうじゃないんだよ。『学は光』ということだよ。ある哲学者の言った『無学は闇。学は光』の言葉だよ」と。それを委員会にはかりましたが、もう誰も反対せず、『学光』が雑誌の名前になったわけです。今や、「学光」は通信教育部の根本精神を示すモットーとなっております。」（前掲「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」、179頁）という経緯があったようです。創刊号からしばらくは、「学光」はソクラテスの言葉が由来であるという説明書きがあるのですが、実際調べて見ると「学は光」という直接的な言及はありません。池田自身は「かつて私は、牧口先生が愛された「学は光なり、無学は闇なり」との言葉から、通信教育部に「学光」の二文字を贈りました」（池田大作『池田大作全集』第61巻、聖教新聞社、2002年、44頁）と語っています。牧口も「無学は闇、学は光ということばもあるが」（辻武寿編『牧口常三郎箴言集』、第三文明社、1979年、191頁）と述べており、どちらの言及も牧口がよく口にしていた言葉ではあるものの牧口自身が作った言葉ではないことを示唆しています。名言辞典などでは、ロシアの諺や、ツルゲーネフの『処女地』が出典となっていることが多い言葉です。由来はともかく、池田は、次のように意義づけています。「『学光』——学の光をもって、わが人生を、そして、社会を照らしゆくのだ。それは、創価大学の通信教育を象徴する永遠の指針が決まった瞬間でもあった。」（池田大作『新・人間革命』第23巻、聖教ワイド文庫、2015年、124頁）。



機関誌『学光』創刊号と、開学式のメッセージが掲載された第1巻第4号。同研究所所蔵。

### おわりに：創価教育における通信教育の意義

「創価教育と通信教育の歴史」というテーマを執筆するに当たって、先行研究として参考にしたのは、塩原将行「創立者の大学構想についての一考察(1) 通信教育部開設構想とその沿革」(『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2006年)です。1978年に創価大学通信教育部の職員となった塩原氏は、それから7年間学生係として通信教育部に尽くし、その後2000年に開設された創価教育研究センターでは初代事務長に就任しました。広汎な資料収集を基に、牧口・戸田・池田の基礎的研究の土台を作ろうとした塩原氏の研究成果の一つが同論文になります。この論文では、池田の開学式のメッセージを分析し、創価教育における通信教育の特色として、①すべての人々に開かれた大学、②働きながら学ぶ学習形態、③通信教育と人間教育、の3点を挙げて考察しています。

ここでは、この3点を踏まえつつ、池田が通信教育部を「第二の開学」と位置づけたことに着目して考察します。創価大学は1971年に開学しますが、その同時代的な背景として、大学紛争があります。大学紛争は、大学当局と学生の対立を主要因とする紛争ですが、1960年代には過激化の一途を辿ります。池田は、この大学紛争における学生運動を単なる世代間闘争や政治闘争ではなく、既存の大学の在り方や社会の矛盾と不合理への反発として捉えていました。創価大学は、大学紛争の暴風が吹き荒れる最中に、新しい大学として出発します。池田は、この新しい大学の特色として、教授陣は青年のような研究意欲を持ち教育に生命をかけて取り組む人を中核にして構成すること、教授と学生の関係はともに学問の道を歩む同志的なもので民主的な関係であること、学内運営は学生参加の原則を実現することなどを述べています。創価大学が新しい大学として開学した5年後に、通信教育部は「第二の開学」として誕生します。

池田が通信教育部の「開学」後に語った「これで創大も人材育成に本腰が入る」(『学光』第1巻第9号、創価大学通信教育部、1976年12月、32頁)、第1回秋期スクーリングでの「この人達の中からダイヤモンドのような人達が出てくる可能性が高いのです」(同31頁)という発言からも通信教育部への期待の高さが窺えます。

これまで述べてきた牧口・戸田・池田の人物および歴史をふまえて通信教育の意義を3点挙げておきたいと思います。まずは、①学校教育の崩壊に対するセーフティーネット、という点です。学校教育は、時代の要請等により干渉や制限がかかることも少なくありません。また、特定の場所・時間を条件とするため、経済的負担と強制力を必要とします。自学自習を基本とする通信教育は、経済的負担と強制力も控えめで、教材さえあれば学習のタイミングや方法も比較的自由に選べます。さらに、人的・外的な事情によって学校教育が崩壊するようなことがあったとしても、通信手段と教材さえあれば、学習の最終的な受け皿として機能することが可能です。

次に、②誰にでも開かれた教育のシステム、という点です。かつては学校教育、特に大学は、一部のエリート層や富裕層のものであって、誰にでも開かれていた訳ではありませんでした。近代学校教育が始まって以来、それを年齢・性別・所属等を問わず誰にでも開かれた教育にしていこうと工夫されていったのが通信教育というシステムです。特定の場所・時間を必要とする教育

は、何かしらの変数をもって選抜せざるを得ないのです。

最後に、③生活との強いつながり、という点です。牧口の考えた創価教育学では半日学校制度が提唱されます。この制度の現実態の一つの在り方として、通信教育は想定されています。生活から出発し、研究（真理の認識・価値の創造）を経て、生活に還元していく。このサイクルによって幸福な生活を獲得していく。そのために生涯に亘って学習生活と実際生活を並行していくことが、半日学校制度の意義です。

創価大学が新しい大学として出発した後、創価大学としての共通性を保ちながら通信教育の意義を備えて「第二の開学」を果たした通信教育部も、2026年5月16日に50周年の節目を迎えます。本稿が、次の半世紀に向けて「創立者」のバトンを受けついでランナーたちへのエールになれば幸いです。



新光友ポスト

<引用・参考文献>

- 天野郁夫『教育と近代化』玉川大学出版部、1997年
- 天野郁夫『学歴の社会史—教育と日本の近代—』平凡社、2005年
- 天野郁夫『増補 試験の社会史—近代日本の試験・教育・社会—』平凡社、2007年
- 池田大作『池田大作全集』第61巻、聖教新聞社、2002年
- 池田大作『若き日の日記』〔1〕、聖教ワイド文庫、2005年
- 池田大作『青春対話 普及版』1・2巻、聖教新聞社、2006年
- 池田大作『新・人間革命』第15巻、聖教ワイド文庫、2007年
- 池田大作『池田大作全集』第101巻、聖教新聞社、2011年
- 池田大作『人間革命』第1巻、聖教ワイド文庫、2013年（第2版）
- 池田大作『新・人間革命』第23巻、聖教ワイド文庫、2015年
- 池田大作『私の履歴書』聖教ワイド文庫、2016年
- 池田大作『完本 若き日の読書』第三文明社、2023年
- 伊藤貴雄・岩木勇作・川口雄一「池田大作における「若き日の読書」の予備的研究—「読書ノート」と創価大学池田文庫とをめぐって（1）」（『創価教育』第16号、池田大作記念創価教育研究所、2023年）
- 池田大作記念創価教育研究所編「池田大作における「若き日の読書」の予備的研究—「読書ノート」と創価大学池田文庫とをめぐって（2）」（『創価教育』第18号、池田大作記念創価教育研究所、2025年）
- 岩木勇作「牧口常三郎のペンネーム「澎湃」名義の作品について」（『創価教育』第17号、池田大作記念創価教育研究所、2024年）
- 岩木勇作「戦後東京都大田区の青年文化運動—池田大作のベートーヴェン講義に着目して—」（『創価教育』第18号、池田大作記念創価教育研究所、2025年）
- 岩木勇作「池田大作の「師弟」観——普遍的な教育論としての「師弟」——」（『東洋学術研究』第64巻第1号、東洋哲学研究所、2025年）
- 岡安博司「創価大学の開学を語る—創立者の大学構想を中心に—」（『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2005年）
- 「学光」編集委員会『学光』創価大学通信教育部、1976年4月～1980年6月刊行の各号および1985年5月号・1995年5月号
- 斎藤正二『若き牧口常三郎』上巻、第三文明社、1981年
- 佐藤秀夫『教育の文化史1 学校の構造』阿吽社、2004年
- 塩原將行「創立者の大学構想についての一考察（1）通信教育部開設構想とその沿革」（『創価教育研究』第5号、創価教育研究センター、2006年）
- 塩原將行「戸田城外著『中等学校入学試験の話と愛児の優等化』（1）～（3）」（『創価教育』第3～5号、創価教育研究所、2010～2012年）

- 塩原將行「池田大作が“戸田大学”で学んだこと」(『創価教育』第15号、2022年、池田大作記念創価教育研究所)
- 菅原亮芳「「独学」史試論—中学講義録の世界をめぐって—」(寺崎昌男編『近代日本における知の配分と国民統合』第一法規、1993年)
- 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 牧口常三郎』第三文明社、2017年
- 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 戸田城聖』上・下巻、第三文明社、2019・2021年
- 創価大学50年の歴史編集委員会編『創価大学50年の歴史』創価大学、2021年
- 高崎隆治『戸田城聖1940年の決断—軍国教育との不屈の闘い』第三文明社、2002年
- 竹内洋『立志・苦学・出世—受験生の社会史—』講談社現代新書、1991年
- 田中菊雄『現代読書法』柁谷書店、1941年
- 田中菊雄『現代読書法』講談社学術文庫、1987年
- 天使救世軍「各種講義録の反面」(『学生タイムス』第2巻第3号、学生タイムス社、1907年)
- 東洋商業五十年誌編纂委員会編『東洋商業五十年誌 附東洋商業卒業生名簿』東洋商業高等学校、1956年
- 戸田城外編『小学生日本 五年』第1巻第1号、日本小学館、1940年
- 戸田城外編『小学生日本 六年』第1巻第1号、日本小学館、1940年
- 戸田城外編『小学生日本』第2巻第8号、小学生日本社、1940年
- 戸田城外編『小国民日本』第2巻第12号、小国民日本社、1941年
- 戸田城外編『少国民日本 国民学校上級生』第3巻第10号、少国民日本社、1942年
- 戸田城聖『若き日の手記・獄中記』青娥書房、1970年
- 戸田城聖『戸田城聖全集』第1巻、聖教新聞社、1981年
- 豊原南村「小説蘭子」(『高等女学講義』(第5回)第2学年第3号、大日本高等女学会、1907年)
- 日本大学百年史編纂委員会編『日本大学百年史』第3巻、日本大学、2002年
- 辻武寿編『牧口常三郎箴言集』第三文明社、1979年
- 牧口常三郎『牧口常三郎全集』第6巻、第三文明社、1983年
- 牧口常三郎『牧口常三郎全集』第9巻、第三文明社、1988年
- 文部省編『学制百年史』本編・資料編、帝国地方行政学会、1972年
- 安田生「教育茶話会記事(第拾三回)」(『教育界』第5巻第5号、金港堂、1906年)
- 山中恒『ボクラ少国民』辺境社、1974年
- 悠木夏文『シリーズ「大学は挑戦する」創価大学』栄光教育文化研究所、1996年
- 石神豊氏へのインタビュー(2025年9月9日)
- 稲光禮子氏、坂本安氏、藤原秀二氏、田中真弓氏、依田文雄氏へのインタビュー(2025年9月20日)
- 創大名所マップ <https://www.soka.ac.jp/edu/document/spot/> (2025年11月25日閲覧)
- ※大学キャンパスの写真はすべて筆者撮影(2025年11月25日)。執筆にあたり、ご協力いただいた関係者各位の皆様はこの場を借りて感謝申し上げます。